

# せなをむし

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第十七号（毎月一日発行）  
平成三年二月一日

## 明治初期の古平 人と農業

近藤 芳 二

明治四年二月、古平開拓使出張所は村役人に「布告書案」なるものを提示している。

- 一、村役人の内組頭、百姓代、宍人ヅツ月番相立置諸御用向取扱可申事
- 二、非常之節村方申合兼而組立置最寄□才以出張所江詰諸人夫割□相定置候様可致候事
- 三、往来手形無之者（みだりに）滞留為致取様世話致間鋪候事
- 四、開拓使出張所邸廻り毎月三・八ノ日、村方特ニ相心得順番（以下不明）

以上四点は、村役人としての任務が箇条書にされたものであ

る。これによって当時の村の様子を想像することができる。

古いアイヌの時代から、フルヒラ（古平）領は、東は余市境、チャラツナイの滝、西は美国境

### 町内の青年団体が大同団結 古平連合青年団結成（大正十年）

大正四年、同級生であった三浦銀治・津田精の二人が、十余人の同志と結成したへ平凡青年団が古平町の青年団の発祥である。その後、各地域で青年団が結成され、同十年二月十一日各団の「連絡と統一を図るため」連合青年団が結成された。

厚苫（ホロキナウス）までときれ、その間式里式拾四丁七間と記録されている。この東西の境界は、全く変更されることなく現在も続いている。この二里二四丁の海岸線に、明治三年の統計によると

場所	軒数	広さ
弁才トマリ	一軒	五間に十間
へ口カルウス	一軒	五間に十間
メナシトマリ	一軒	五間に五間
オタスツ	一軒	四間に十間
ラルマキ	一軒	四間に八間

蔵など数十軒が建っていたようである。これらの建物は、どこにどう建っていたのかについては不明であるが、番屋についてはほぼ下記の表のようである。

——つづく——

【今日日はこんなの日】

### 古平連合青年団結成（大正十年）

- ▼青年団の現況（昭和二年）▲
- 群来村自彊団 相内 吉蔵
- 古平潮陵青年団 阿部 善吉
- 古平中央青年団 名達 博
- 古平北斗団 小関小一郎
- 泥の木青年団 落合勇之丞
- 沖青勇団 八反田善助
- （古平松操会 梅野モン）

（沖村処女会 田岸キサ子）  
男子会員数三三〇名（女子一九五名は後に加入した）  
社会の発展する時には、青年の若いエネルギーがその基盤にある。町民の七％に当たる青年団員がそれぞれの地域で、さらに合同して、自己の研修や郷土の発展に活動していた。  
団長には、町長三上良知が就任した。戦時下の昭和十五年に新しい組織に改められた。

# 【話の屑籠】

## — 皆さんもどうぞ —

今の子どもが聞いたら笑うかも知れないが、私たち子どもも頃、『りんご』のことを『りんき』と言った。私の記憶違いかと思つて昔の人に聞いてみたら、皆さん「そんだ、そんだ」と確認できた。

# 故郷を想う福井幸平

それではいつの頃から、りんごと言つたか？ 誰に聞いてもはつきりしない。

最近、古平に転勤になつたある先生が、「こちらの言葉は難しくて分からない。」とこぼしていた。

「小便して来る」ことを「あがかいで来る」から、ちよつと待つてれ！ では、何のことかさっぱり分からなかつた。なるほど、古平にはいい言葉が沢

山残つてるよ。小舟を漕いでいて舟底に海水が溜ると、「早くあかをかけ」という。なんとも簡潔にして、うがつた言葉ではなからうか。これを、「急いで海水を汲み出しなさい」なんて言つていたら、舟が沈んでしまふかも知れない。

その先生に、古平の方言を五つ、六つ紹介したらびっくりした。少し調子に乗つて、「先

生、教養ねえなあ。勉強やり直したら——」なんて、からかたことがあつた。

若い頃は、こんな『方言』を使つたりするのは、少し気恥ずかしい思ひましたが、このとしになると、これが『故郷の文化だ』と誇らしげにさえ思うのである。言葉だつて、それぞれ生活に密着した中から生まれ、育

つて来たんだらうから——。人間社会、なにかも金太郎

あめ式？ なら味も素っ気も無いものになつてしまふだろう。価値観の相違——結構だと思ふ。皆さん、どう思ふかね。

この故郷の、いろいろな歴史が消えてしまふのが残念でならない。人間の歴史は、人間一人一人が創造してゆくものだと思う。そして、過去——現在——

未来へと歩んで来たのである。過去が分からなければ、現在も未来への展望も無いのである。過去のことを教訓として、未来

への夢を持つてではないか。

『せたかむい』が発行されて今回で十七号。どなたも気張らずにどしどしこの紙面に投稿してみ、大いに昔のことを語つてみ

## ニシンの源(中)

津軽地方では、鱧の干したものを『カド』といつて、生魚を『ニシ』といつている。南部地方でも『カド』という名前で、南部の殿様に毎年献上したという記録がある。

ではどうでしょう。町史ならぬ町意外史のことを、話の屑籠にポイポイと投げ入れてみませんか。

何時かこんなくだらない話でも、ふるさとの文化史の下敷きになることを信じて——。

(つづく)

『カド』というのは、乾燥した堅い魚という意味で、これから鱧の干したものをいうようである。

古い本によると、鎌倉時代までは鱧を生で食べる人はいなかつたという。『カツオ』といえどもともと干した堅魚(かたきうお)という意味で、後になつて生魚も『カツオ』と呼ぶようになったので、干したものを堅魚節として区別した。

『ニシン』または『ニシ』と呼ぶのは、アイヌ語の『ヌーシイ』からきている。アイヌ語では、漁獲の多い時、または群集することを『ヌー』或いは『ヌーシ』といつている。

——つづく——

## 先輩のご苦勞そして 新しい時代の流れ

昭和二十二年、戦後の混沌とした社会情勢の中にあつて、いち早く立ち直り、「新しい時代に生きる」との願いをこめて、新生婦人会が誕生したと聞いております。

昭和六十二年の秋、当時ご苦勞されて歴代の会長様をお招きして、会員百五十数名と共に盛大に創立四十年記念式典をお祝いすることができました。

前会長の逢見様を中心として、会員が一丸となつてその準備に汗したことも、今では懐かしい思い出となりました。

念願の記念誌も発行いたしましたが、その原稿集めも又大変なことで、係の人たちは随分と苦勞したのですが、今と比べてみますと、その苦勞が得難い

## 新生婦人会の歩み

宝物として残っております。

現在、会員の年代も幾分若返つて来ておりますが、その中であつて発足当初より四十数年、本会と歩みを共にされている素晴らしい会員が三名いらつしやいます。

いつまでもお元気で新生婦人会の為に力添えを、と祈らずにはおられません。

年号も、昭和から平成と変わり、私たちを取り巻く社会情勢も著しく変化して参りました。昨年からは、婦連協の組織も変わりまして、今までは、沢江婦人会・新生婦人会・商工婦人会・二葉婦人会・漁協婦人会の五団体で構成されておりましたが、道の指導により、女性の自立プラン協議会なるものを組織する為に、商工婦人会と漁協婦人会が脱会し、沢江・新生・二葉の

三団体で婦連協の運営に当たつております。時代の流れとはいながら淋しい気がしてなりません。 — つづく —  
(新生婦人会会長 山口笑子)

## 水戸黄門「快風丸」 建造の

### その昔 古平沖を通過か

茶の間ですっかりおなじみの

水戸黄門こと徳川光圀が、南部藩・津軽藩の殿様に命じて大船を建造させた。工事に数年もかかってようやく竣工し、これに「快風丸」と名付けた。船の長さ十八間(三十二.6余り)、帆五百端(反)で、乗組員四十四人というものであった。幕府の厳しい禁制があつた中で、このような大船を建造出来たというのは、さすが徳川ご三家のご威光とでもいふべきか——。

さて、船が完成してよいよ貞享四年(一六八八)、崎市内を船頭にして松前に向けて出航したのである。

荒波を乗り切つて松前に入港してみると、「規則なので、これより奥地に入ることは許可出来ない」と、船番所の役人から拒否された。黄門さまのご威光

も遠い蝦夷地では通用しなかつたらしい。例の腰の『印籠』を持って行かなかつたようだ。

しかし、頑固な？ 黄門様のこと。こんなことでは諦めたりはしなかつた。

再び、元禄元年(一六八八)今度は商船に姿を変えて船番所を無事に通り、松前からさらに北上して、海の難所神威岬を廻り、石狩に到着したのである。

当時そこに住んでいたアイヌの人たち千余人は、その船の大きいのに皆驚いたという。

快風丸はその石狩場所、アイヌの人たちとの交易をしている。

米二斗(三十匁)蛙六十尾 快風丸は、石狩に四十余日留まり帰路についたが、途中台風

に遭い、シベヤ沿岸にまで数日間漂流したが、松前に戻り、十二月に水戸に帰った。今からざつと三百年も前のことである。

このころ古平は、アイヌの人たちの家が二、三十軒あつたよう、沖を通る快風丸を村中総出で見っていたかも知れない。

# 昔の あそび 軍旗がし

本 間 銀 朔

作り、毛糸で柄のところに房を付けたりしたものを腰に吊す。鉄砲は、板で銃の型を作り、

勲章はブリキ製で、本物に似せた作った白色桐葉章・青色桐葉章や、瑞宝章（こんぺい糖とも言う）、金鷄勲章の七級・八級、大勲位の丸い勲章まであって、それらは、色彩もきれいなものであった。当時、一個一銭か二銭で売られていた。

だが、自分で店から買って来ても、それは勝手に自分では使えない。買ったものでも兵隊仲間に出し、自分の権利はない。何時か上級生に手柄が認められた時に、それをもらって着けることができる。

剣と鉄砲は手製である。剣は針金の六番線を五〇センチぐらいに切って、それに枯れた竹で鞘を作り、柄を付ければ出来上がる。これはゴンボ（ごぼう）剣といって、下っ端の者が腰に吊す。上級生は、少々長いのを

銃身は竹で、銃の大きさによってそれぞれの長さに切って釘で打つ。和服に澱粉靴を履いて、野原や山を走り回って遊んだ。日没までも遊び、余り遅くなつて家に帰ると叱られたりした。当時の遊び仲間の大半は故人になつてしまつて、もうこの世には居ない。淋しい限りです。

—— つづく ——

## 資料の借用と寄贈

★煙草入れ（甲州印伝）二点 服部忠司さん

★古文書類（三十六点）

★高野名幸作さん日記（昭三十三ノ脚三十四年）

★風俗・記録写真アルバム 高野名正治さん

★差網あば（許可印）十二点 常本利男さん

—— 以上 ——

お忙しい中どうもありがとうございます。ございました。

## 鯨漁場も機械化の時代へ

### 鯨陸揚げにウインチを設置

毎年とれるもの——と思つ

ていた鯨漁にもかげりが見え始めたが、それでもまだ大量漁獲時代は続いた。網に入った鯨を短時間に陸揚げすることが漁獲量の増大になるので、それを機械化しようことは早くから考え

漁場でウインチ（鯨陸揚げ機）が設置されている。

沖村 田岸 貞治

歌葉村 仲谷勇五郎

入船町 山口 金治

同 種田 銀作

同 種田幸右衛門

群来村 渡辺 宗作

山口漁場は大正十四年と最も早く、また、動力として一箇所だけ電動機を使つていて、他は蒸気機関であった。

現在も田岸・仲谷・渡辺各漁場の土台の石垣が残つていて、その昔を偲ぶことができる。

ところで折角展望のウインチを設置したものの、皮肉にもそのころから鯨の漁獲量は急激に減り、昭和五年はゼロに等しかった。以後、鯨は減少の一途を辿り、錆び付いた機械が再び動き出すことはなかった。

（これは、高野名幸作さんの日記、田岸倉治さんの記録、田中勇さんの談話等を参考にしました。次回は、ウインチの働きぶりを紹介します。）

られていたが、それには莫大な費用がかかった。しかし、その経済性を考え合わせ、資力のあつた漁業家は積極的に機械化を図つていたのである。古平では、大正十四年から昭和四年ころまでに、六箇所の鯨